

高等学校国語科における文学的文章を活用した 教材開発と学習指導に関する研究

～ショートショート・掌編小説を中心として～

学籍番号 229310

氏名 吉井大晟

主指導教員 成實朋子

副指導教員 村井隆人

1. 研究の目的と方法

本研究は高等学校国語科の授業において文学的文章、中でも小説を題材として教材開発及び学習指導の検討を行うものである。

文学を読むことで日常の経験によって形成された価値観やものの見方・考え方が変容させられる。それこそが文学を読むことの面白さと言える。また、小説は虚構の世界を味わうことで心を揺り動かし、自分とは何か、自分の生き様はどうなのかと迫るものだ。

自身の世界観にまで影響を及ぼすような体験をするためには小説の中の虚構のしかけについて追究していくような読みが必要となる。学習者自身が小説を読む中で「問い」を発見し、その「問い」を何度も問い直し、深化していく。その過程において自らの考えをメタ認知し、思索を深め、自らの認識する世界を更新していく。この過程が「追究のある学び」となるのだ。

一方で、学習指導要領の改訂により小説を扱う機会は減ってきている。また、小説を扱う際には教訓的な読み方を伝えるための授業が展開されることが多かった。そのような授業では学習者の小説の読みは画一化されてしまい、結果として小説は学習者にとって、実生活には不要なもの、つまらないものとみなされてしまうとも考えられる。

本研究では限られた環境の中で、作品のもつ普遍的なテーマ性に着目しながら、自ら「問い」をたてて追究的に読んでいくことにより、高校生が小説と言う虚構の世界を楽しんで読む姿勢を養うことを目的とする。生徒が作品から普遍的なテーマ性を読みとり、作品の魅力を感じることができる授業を構想したいと考えた。

2. 実習校の実態

筆者が実習を行ったのは大阪府立の普通科の高等学校である。

小説の授業においては自身とは遠い世界観を持つ作品の内容の的確な読み取り、本文の中で描かれていないことに目を向けること、小説特有の表現や文体への理解、の3点が課題であることが分かり、これらを解決することを目指した。

3. 安部公房「良識派」を用いた授業実践

「基本学校実習Ⅱ」では安部公房「良識派」を扱った。

作者の作品に込めた思いや創意に気づき、寓意を理解するとともに、その寓意が現在の我々の生活と密接につながることに気付かせる授業を目指した。

題を想像する活動と作品の紹介文を書く活動と作品を作り直す活動を行った。

結果として、多くの生徒は作品の寓意に迫ることはできず、本作品の普遍的な価値に気づくまでには到らなかった。

活動に対する筆者の説明不足や課題の内容、活動後の共有といった点に問題があった。

4. 森鷗外「木精」を用いた授業実践

「発展課題実習Ⅰ」では森鷗外「木精」を扱った。

文章内の特徴的な表現に注目することで作品に込められたテーマに気づき、人間や自己の生き方を内省することを目標とした。

実践では主に「木精」のテーマ、森鷗外が伝えたかったことをまとめる活動を行った。

結果として、多くの学習者が作品の主題に気付くことはできていたが、どの程度読み深められているかについては個人差が出てしまった。

活動はあくまで個人作業となった上に、提示した問いや資料が煩雑となってしまう、生徒は考えを十分に深めることが出来ず、作業に追われてしまう結果となった。

5. 小川国夫「物と心」を用いた授業実践

「発展課題実習Ⅱ」では小川国夫「物と心」を扱った。

語られない部分に目を向けることで、物語の世界観に入り込むことを目指した。

登場人物になりきって日記を書く活動と題について考える活動を行った。

結果として、「追究のある学び」、「深い学び」を実現できていたと考えられる。生徒は主体的に小説を読むことに関してやる気を喚起し、自ら追究する読みを行うようになっていくようになったと言えるだろう。

6. 本研究の成果と課題

本研究では教材開発という面で成果を挙げられたのではないかと考える。実践で扱った3作品の全てで生徒は作品を読むことを楽しむと同時にそれぞれの活動を通して、作品の持つ虚構の世界観に触れ、普遍的なテーマ性について考えることができた。作品の持つテーマ性が高校生の実情と合致した結果と言えるだろう。

また、実践を通して生徒の「追究のある学び」、「深い学び」を実現する活動の特徴として以下の①生徒の思考の自由度が高い、②生徒に与える情報が精選されている、③目的が一つに絞られているが挙げられると考えた。短い授業時間の中で小説をどのような活動として扱うべきであるかということに関してわずかではあるが明らかにすることができた。

今後は、さらなる教材開発と指導方法の模索を行っていきたい。